

偏見・差別にさらされる B 型肝炎被害者

田 中 泰 恵[※]

要旨：

本研究は、集団予防接種等による HBV (B 型肝炎ウイルス) 感染被害者の生活困難の実態を解明し、被害者救済・恒久対策等今後の支援策への示唆を得るものである。本稿では、偏見・差別に関する被害実態の解明と、その認識を構造化することを目的とする。被害者のうち 111 名の協力を得て、2013 - 14 年にインタビュー調査を実施し、逐語録をもとに KJ 法による質的研究を行った。

その概要は、医療者の心無い対応や処遇等〈医療現場の差別〉に傷つき、〈母子感染で差別が拡大〉し我が子にも累が及んでいた。また、職場では排除の論理が働いて、被害者は〈働きづらい〉状況に陥っていた。さらに〈引き裂かれる絆〉に、夫婦・親子・きょうだい・恋人等の人間関係にも亀裂を生じていた。被害者は、社会の無理解や無関心から生じる、偏見や差別の折り重なる被害にさらされ〈身のおき処がない〉状態に陥り、安心して他者と関係を築くことができない状態となっていた。加えて今日のネット社会では、不十分な、〈情報が一人歩きする〉ことで被害はさらに拡大していた。こうした中、一歩前に出ようと偏見や差別から立ち上がり〈提訴に踏み切る〉ことで自分を取り戻し、新たな関係を築こうとする人々もいた。

HBV 感染被害者は、様々な生活場面において偏見・差別の折り重なる被害に苦しい思いを抱いていた。彼らの心の底に堆積したつらい思いが、自らの身を一步引かせる。それは、被害者を「安心して他者と関係を築けない」状況に追い込み、普通の市民生活を奪っていた。更に今日の情報社会では、不十分な情報が独り歩きすることで被害を拡大していることも明らかとなった。

偏見・差別の克服には、①全ての人々が肝炎に関する正しい知識を身に付け広めていくこと、②被害者が普通の市民生活を送ることができる社会づくりが重要である。そのための「点」から「線」さらに「面」へと被害者のエンパワメントやその支援のあり方等が示唆された。

キーワード：HBV 感染被害、偏見・差別、折り重なる被害、KJ 法

HBV Patients Who Are Exposed to Constant Prejudice Discrimination

Yasue TANAKA

Abstract：

The purpose of this study was to elucidate the realities of hardships in the lives of victims infected with HBV (hepatitis B virus) from a mass vaccination and to obtain information and ideas for future support measures for the relief of victims as well as permanent solutions. This article aims to shed light on the actual status of the victims as a result of prejudice and discrimination

[※] たなかやすえ
青森県の星短期大学 非常勤講師

and to structure their perceptions. With the cooperation of 111 victims, interviews were carried out from 2013 to 2014. Based on verbal records of those interviews, a qualitative study has been conducted using the KJ method.

The results showed seven areas of difficulties regarded as symbols of the hardships: *discrimination in medical practice, expansion of discrimination to the children due to mother-to-child transmission, uncomfortable working condition, severed bonds, not knowing what to do with oneself, information assuming a life of its own, and bringing to court.*

HBV infected victims experienced prejudice and discrimination in a variety of aspects of their daily lives. Such distress accumulated over time and became a major obstacle for the victims. Victims were unable to build healthy emotional relationships with others and were not allowed to participate in the community as a typical citizen might. Furthermore, in today's information society, incorrect information developed a life of its own, resulted in multiplying the victims' suffering.

In order to eliminate prejudice and discrimination, there are two key factors: (i) every individual learns and disseminates correct knowledge about hepatitis, and (ii) creation of a society where the victims can live as a normal citizen. For these purposes, ways to empower and support victims was suggested for each point, then to each line formed by the points, and finally to each plan created by the lines.

Key Words: victims infected with HBV, prejudice and discrimination, discrimination in a variety of aspects, KJ method

I. 研究の背景と目的

集団予防接種等によるB型肝炎ウイルス（HBV: Hepatitis B Virus）感染者は40万人以上と推定されている（厚生労働省2011）。それは、昭和23年から63年までの間に実施されたBCGやジフテリア等の集団予防接種における注射器の連続使用によりB型肝炎ウイルスの感染が直接・間接の原因となり感染拡大に至ったものである。

B型肝炎訴訟は、札幌地方裁判所に5名の患者が乳幼児期に受けた集団予防接種等とHBV感染被害との間に因果関係があるとして提訴（1989年）したことに始まる（奥泉・安井2004¹⁾、奥泉2007²⁾）。17年の歳月を経て、最高裁で原告勝訴の判決が下された。その後、2011年B型肝炎訴訟に関する「基本合意書」の締結及び国による謝罪により一定の決着を見た。しかし、国による被害救済や恒久対策は進展しておらず、被害者及び遺族から早期実現が求められる喫緊の課題となっている。

2012年厚生労働省は、「集団予防接種等によるB型肝炎感染拡大の検証及び再発防止に関する検討会（以後、検証会議）」を設置し、肝炎ウイルス感染症に対する偏見や差別の実態把握、被害防止のためのガイドライン作成のための研究（龍岡2013³⁾）、集団予防接種によるB型肝炎感染拡大の検証及び再発防止に関する研究（多田羅2013⁴⁾）が進められた。

上記報告書において龍岡らは、アンケート調査結果の分析を通し、偏見・差別の実態把握、肝炎患者に対する偏見や差別の構造を明らかにしている。すなわち、一般の生活者へのアンケートから肝炎患者に対する偏見や差別を生む要因として、肝炎患者には「差別化となるネガティブの要因」、一般生活者には「感情的要因」、及び「関係性排除の要因」の3つがあるとしている（龍岡2015⁵⁾）。

集団予防接種等によるHBV感染被害に関する先行研究は極めて少ないが、検証会議の被害調査結果を対象とした質的研究がある（岡・三並2012⁶⁾ 2013⁷⁾）。いずれもB型肝炎感染被害者への全国調査における自由記述を基に、KJ法を用いて質的研究を行っている。それによるとB型肝炎感染判

明時の医療現場での不十分な対応、職場・公的機関などでの社会的排除の経験など、偏見・差別にかかわる報告がなされている。

検証会議における報告書において被害の全体像が把握されているが、被害者一人ひとりの苦しみや思いを深くとらえる点においては限界がある。そこで本研究は、被害者一人ひとりの病気や生活の様子等個人レベルに視点をあて、2013－2014年に実施したインタビュー調査111事例の逐語録をもとにKJ法による質的研究を行った。

本稿では、偏見・差別に関する被害者の認識を構造化し、被害の様相を明らかにし、被害救済や恒久対策への示唆を得ることを目的とする。以下にその詳細を述べる。

Ⅱ. 研究方法

1. 対象と方法

全国B型肝炎訴訟原告団・弁護団の協力を得て、全国各地で調査への協力を得られた111名を抽出し、半構造化による面接調査を2013年10月～2014年4月に実施した。主な聞き取り内容は、感染判明当初の状況と現在の病態・医療機関や治療の状況、医療費負担、生活上の困難、国や社会への要望等である。

2. 研究倫理に関する配慮

調査に当たって、回答者の個人情報、プライバシーに直接かかわることから、回答者が特定されることのないよう個人情報の管理を厳にし、倫理面に配慮した。すなわち、研究責任者の所属する研究機関での研究倫理審査を受けて承認された後に、協力者に調査目的と倫理的遵守に関する文書及び口頭での説明を行い、了承を得て同意書に署名をいただいた上で実施した。

3. KJ法による質的研究法

調査結果は、KJ法^{8, 9, 10)}によって構造化した。調査協力者の同意を得て作成した逐語録の中から、研究目的に関係があると判断した内容をラベル化し（668枚）、多段ピックアップにより精選したラベル（30枚）を元ラベルとして、狭義のKJ法¹¹⁾を行った。

Ⅲ. 狭義のKJ法の結果

1. 全体像

ラベル群のグループ編成を2回繰り返した結果、7つの「島」に統合された。図解及び結果を下記に示す。なお文中において、元ラベルは「」、第1段階表札は『』、第二段階表札は【】、シンボルマークは〈〉で表した。

最終的に統合された7つの「島」を概観すると、B型肝炎被害者は生活の様々な場面において被る偏見や差別に苦しい思いをしていた。即ち、医療者の心無い対応や処遇等〈A医療現場の差別〉に傷つき、〈B母子感染で差別が拡大〉し我が子にも累が及んでいた。職場では排除の論理が働いて〈C働きづらい〉状況に陥っていた。また、〈D引き裂かれる絆〉に、夫婦・親子・きょうだい・恋人等の関係に亀裂が生じていた。この様に、被害者は誤解や差別により〈E身のおき処がない〉状態が恒常化しており、安心して他者との関係を築けなくなっていた。

加えて今日のネット社会では、〈F情報が独り歩きする〉ことにより、不十分な情報から被害がさらに拡大していた。

こうした中、偏見・差別から立ちあがり、自分らしく生きようと一歩前へ踏み出し〈G提訴に踏み切る〉被害者もいた。

以上、図解の総タイトルを『偏見・差別にさらされるB型肝炎被害者』とした。

2. 各島の詳細

〈A医療現場の差別〉

B型肝炎被害者は、医療現場における偏見・差別による体験として、「医師が母子感染の母を、水商売人のように捉え」たり、「歯科で、エイズの人とB型肝炎の人お断りと書いてあり愕然とした」等、『医療者の心ない対応に唖然と』するような扱いを受けていた。さらに、「看護師がこの患者の血は汚れているから、洗濯物を別にと言った」り、「キャンプ用の使い捨て食器が使われ自分で焼却場まで捨てに行った」、「トイレや風呂等で差別的対応が平気で行われていた」等、『差別を感じる処遇を日常的に強いられた』。

このように、【医療者の対応が、感染症対策というよりあからさまな差別・排除であることに傷ついた】という体験が多々語られている。

〈B母子感染で差別が拡大〉

『母の感染は、差別としても我が子にも累が及』んでおり、〈母子感染で差別が拡大〉し、二重に傷つけられていた。例えば、母親から「母子手帳に予防接種としてB型ワクチンが書いてあり、他の人に知られるのが嫌だった」、「保育園の先生に感染予防ワクチンを受けに行くことを伝えたら、態度がガラッと変わった」等と語られた。

〈C働きづらい〉

『職場では排除の論理がはたらく』ことが多く、働こうとする意欲が押しつぶされていた。効率優先の職場では、「再就職面接時、B型肝炎であることを話すと全て不採用になった」、「職場の皆の前でB型肝炎の人がこの中にいると言われた」、「職場で、私が入れたお茶は飲んでもらえない」等、採用、仕事、職場の人間関係等、社会生活を送る上でもB型肝炎故の〈働きづらい〉状況が語られた。

〈D引き裂かれる絆〉

さらに、〈引き裂かれる絆〉が被害者をさらに追い詰めていた。B型肝炎感染の被害は家庭生活にも容赦なく忍び寄ってくる。最も身近な人と安心して共に過ごしたいという、あたり前の願いが壊されて【家族関係にも亀裂が生じ】ていた。

「夫に病気のことを言えず離婚した」、「妻は私が箸をつけたものは絶対に食べない」等、感染が分かったことで『夫婦の間にも深い溝ができ』てしまう。結婚についても「そういう病気持ちの人に娘は任せられないと言って離婚させられた」、「結婚相手に感染のことを話したら家族に猛反対され話が流れた」等、『家族の反対が二人の仲を裂』いてしまっていた。また、「この家には邪魔な人間がいると家族の中でも差別され苦しんだ」り、「実名訴訟について、父は人に知られて恥になるような事をするなど言った」等、『親きょうだいからも家族であることを恥だと思われる』と語られた。

〈E身のおき処がない〉

上述のように、医療・職場・社会・家族等の日常的な生活現場において浴びせられる冷ややかな目に、B型肝炎被害者は【誤解や差別におびえ、安心して関係を築けない】状況に置かれ、精神的にも身構えることを強いられ、〈身のおき処がない〉と感じていた。

「職場にわかると口には出さずとも白い目で見られる」のではないかと、「B型肝炎であることが周囲に知れたら社宅には住み続けられない」と、『世間に知られるのが怖い』と思っていた。また「近所

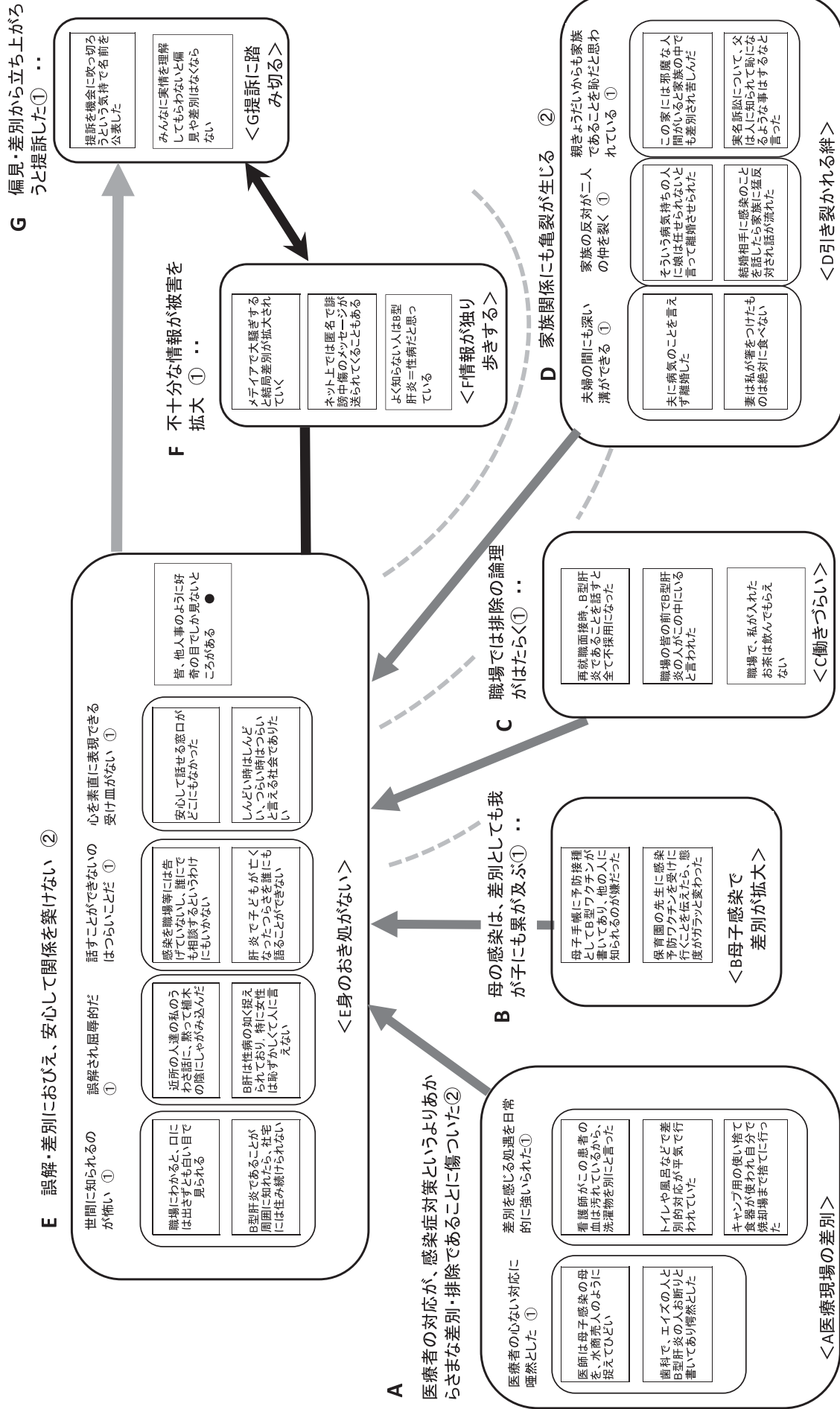


図 1 KJ法図解『偏見・差別にさらされるB型肝炎被害者』

1) 2015. 4. 10 2) 青森 東京
3) HBV 感染被害についてのインタビュー調査 4) 田中泰恵 岡多枝子 時本ゆかり

の人達のうわさ話に、黙って植木の陰にしゃがみ込んだ」り、「B肝は性病の如く捉えられており、特に女性は恥ずかしくて人に言えない」等、人々から『誤解され屈辱的だ』と感じる人もいた。

また「子どもが肝炎で亡くなったつらさを、誰にも語るができない」、「感染を職場等には告げていないし、誰にでも相談するというわけにもいかない」、と心の内をありのままに『話すことができないのはつらいことだ』と語っており、心が萎縮している様子が浮かび上がる。

さらに、「安心して話せる窓口がどこにもなかった」、「しんどい時はしんどい、つらい時はつらいと言える社会でありたい」等、『心を素直に表現できる受け皿がない』ことが余計に生きにくさにつながっていた。また、世間を「他人事のように好奇の目でしか見ないところがある」と受け止める者もいた。

〈F 情報が独り歩きする〉

情報社会にあって、いわれのない偏見・差別が「メディアで大騒ぎすると結局差別が拡大されていく」。例えば「よく知らない人はB型肝炎＝性病だと思っている」など、誤った情報が流布され広がっていくことへの危惧が語られている。加えて「ネット上では匿名で誹謗中傷のメッセージが送られてくることもあり」、さらに追い打ちをかけられる。

こうして、生活のあらゆる場面において〈情報が独り歩きする〉ことにより『不十分な情報が被害を拡大』していた。被害者は不特定多数や匿名性といった大衆的な規模での、つかみどころのない差別に不安をおぼえていた。

〈G 提訴に踏み切る〉

国の肝炎対策が遅々として進まない中、「提訴を機会に吹っ切ろうという気持ちで名前を公表した」人や、「みんなに実情を理解してもらわないと偏見や差別はなくなる」と、自分を取り戻し一歩前に出ようと、〈提訴に踏み切る〉人々がいた。

『偏見・差別から立ち上がろうと提訴した』ことで、自己を解放し、萎縮した気持ちを吹っ切り、新たな関係を構築していこうとしていた。

IV. 考察

ここでは、医療現場、生活場面、メディアの3つに着目し、偏見・差別が生まれる状況や構造、拡大する差別について述べていく。

1. 医療現場における偏見・差別

偏見や差別の経験は、歯科医院や病院等医療現場での事例が少なくない¹²⁾。本調査においても、特に歯科の医療処置を受ける場面での過剰な対応や、病院の治療や入院生活時の差別的対応が挙げられていた。

医療者からの差別的な言動として、例えば、病院の入り口にエイズの人とB型肝炎の人お断りと書いてあったり、血が汚れているから、洗濯物は別にと言われたりしている。また食事は、使い捨て食器を使用し、自分で焼却場まで捨てに行かされ、トイレは、使用禁止の札の貼られたトイレを使用するように言われた等、差別的対応が平気で行われていた。

勿論、病気ゆえの医療的対応は理解できるが、むしろ、医療者の配慮に欠けた言葉や対応の在り方が、B型肝炎被害者（患者）にとって、（感染症対策というよりも）あからさまな差別・排除として受け止められ傷ついていた。こうした中、「医療的対応をきちんとしていれば、B型肝炎感染者か否かと聞く必要はない」と標準予防策の重要性が語られた。

診療拒否などは明らかに不当であるが、たとえ標準的な予防策であっても、患者が偏見や差別と受け止める場合もある。医療者からの患者への十分な説明や配慮などが欠かせないと言える。

こうしたことから、医療従事者は最新の正確な専門知識を身につけ、患者に対して配慮をもって接する必要がある。一方、病気や患者（被害者）への理解には、全ての人々に対してB型肝炎に関する正しい知識の啓発・普及が欠かせない。この点不十分なまま今日に至っており、早急の取り組みが求められている。

2. 偏見や差別がうまれる構造

龍岡¹³⁾は、肝炎患者に対する一般生活者が抱く偏見や差別の構造について明らかにしている。それによると、ウイルス性肝炎に関する知識の欠如ないし不足が主な要因となって、それが治癒困難な怖い病気であるというイメージ（差別化となるネガティブの要因）を形成し、感染に対する恐怖心（感情的要因）から肝炎患者に対する忌避感（関係性排除の要因）を生じさせ、偏見や差別につながるとしている。

本調査においてもこうした要因の例が示された。例えば、働きづらさとして「再就職面接でB型肝炎であることを話すと不採用」につながったり（差別化となるネガティブの要因）、「職場のみんなの前でこの中にB型肝炎の人がいる」と非難の目を浴びせられたり（感情的要因）、「職場で、私が入れたお茶は飲んでもらえない」（関係性排除の要因）等、偏見・差別の構造要因が語られていた。

また、B型肝炎差別は母親だけにとどまらず、その子にまで累が及ぶ。「保育園の先生に感染予防ワクチンを受けに行くことを伝えたら態度がガラッと変わった」というが、この様な職員の反応も、知識不足から来る感染に対する恐怖心、関係性排除といった心理背景から来る偏見・差別といえる。母子感染というかたちで何の罪もないわが子にまで累が及ぶことに対して、母親の深い悲しみ、無念さも見て取れる。

さらに、夫婦・親・きょうだい関係をはじめ結婚や離婚といった人生の節目にも、被害の影を落とす。支え合えるはずの身内であるのにそこにも亀裂が生じ、心が「家族」でいられない状況に陥っていた。夫婦間に深い溝ができた、家族が二人の仲を裂いたり、親きょうだいから家族であることすら恥だと否定されたりしていた。「邪魔な人間がいると家族の中で差別され」たり「父は人に知られて恥になることはするな」と言ったりと、「家」や「世間体」が前面に出て、安心できるはずの居場所や、あたりまえに普通の生活が送れるという願いが後退を余儀なくさせられていた。

さまざまな日常生活の場で浴びる偏見・差別の体験は、一つひとつの体験は小さくても、決して消え失せることなく「澱」のように心の底に積もる。それは、被害の事実を知られないよう、ためらい、息を潜ませた生活を被害者に強いていた。

以上のように、龍岡の述べる概念に加えて、本調査におけるKJ法分析結果から、偏見・差別の被害は二重三重に折り重なっており、他者と「安心して関係を築けない」状況に追い込まれているという構造が明らかとなった。

「安心して関係を築けない」。即ち、自分らしく生きることができない、身を一步引いてしまう生活は、被害者を身構えさせ、安穩に暮らせない状態へと追い込み、普通の市民生活を送ることを奪っていた。偏見・差別の克服には正しい知識の啓発・普及が重要であるとともに、被害者が安心して暮らせる（安心して人間関係が築ける）社会づくりが必要である。

3. メディアが拡大する差別

今日の情報社会にあって、誤った情報・風潮が独り歩きすることにより差別が拡大してしまうことへの危惧が語られていた。

例えば「メディアで大騒ぎすると結局差別が拡大されて行く」、「ネット上では匿名で誹謗中傷のメッセージが送られて来ることもある」等、差別が匿名や不特定多数の人々によって浴びせられるこ

ともある。また、報道番組でB型肝炎を取り上げることで反って差別を助長するという意見もあった。こうしたことから、(B型肝炎に関する)不十分な情報が独り歩きすることにより、偏見・差別が助長され被害が拡大していく構図が浮かび上がった。

その一方で、被害者同士がつながりあう手段としてネットワークの輪が広がりつつあり、勇気や希望を得ている人もいることが語られた。

以上のことから、誤った情報の独り歩きが偏見・差別を助長してしまうこと、偏見・差別を乗り越えるためには、生活のあらゆる場面において正しい情報を社会全体で共有することが、大切であるといえる。

V. 結論

B型肝炎被害者は、医療現場での差別や母子感染による子どもへの差別が拡大、排除の論理により働きづらい職場、家族・人間関係にも亀裂が生じ引き裂かれる絆等、身近な生活の場における偏見・差別に苦しんでいた。日常的に被る理不尽な仕打ちにより、被害者は偏見や差別に自分の身を一步一步引き、おびえ、安心して関係を築けない状態に置かれていた。

偏見や差別が生まれる構造として、肝炎に対する正しい知識の欠如が主要因として挙げられるが、加えて本研究において、被害者にとって様々な日常生活の場で浴びる偏見・差別の体験は①複雑に折り重なっており、②身のおき処のない状態となり、③他者と安心して関係を築けない状況の中に放り込まれ、④自分らしく生きることができない状態におかれるといった負の連鎖に陥ってしまっていた。

それは、感染被害の事実を知られないよう、耐え、ためらい、息を潜ませた生活を強いて、被害者をあらゆる関係に対して、身構えさせ、安穩に暮らせない状態へと追い込み、普通の市民生活を奪ってしまう。

こうした偏見・差別の克服には正しい知識の啓発・普及の重要性とともに、被害者が様々な生活場面において、安心して関係を構築できるような社会づくりが必要となる。

患者への理解には、医学教育における意識改革や、一般の生活者や小学生からの学校教育の中で、身体や健康、感染症や生命に関する基礎的素養を養うこと、肝炎に対する正しい知識の啓発・普及が欠かせない。一方、被害者が差別・偏見の懸念を払拭し、積極的な人間関係を構築するためには、全ての人々が自分らしい普通の生活を送ることができる社会づくり、被害者が元氣になれる支援と方策が求められる。

「誰にでも相談するわけにもいかない」「世間に知られるのが怖い」との声から、被害に対する世間の無理解・無関心から各自が孤立状態におかれ悶々としているようにも受け止められる。これまでも、病院併設の相談窓口等はあるが十分に機能していないようである。インタビューの中で例えば、当事者が運営する緩やかな集まり、胸の内が話せる場、語り合える場(サロン・スペース)が身近な場所にあることを求めている。まずは、「安心して関係を結べる」場づくり、「点」を「線」につなげるところから始めることである。

また、新たな関係と自分らしい生き方を模索する被害者や、偏見・差別から立ち上がり、感染被害の真相究明と被害者救済の道を確立しようと提訴する被害者もあり、「面」の展開へと広がりを見せているところもある。

こうした取り組みを脇から支える社会づくりとして、医療従事者はもちろん一般生活者を含め、全ての人々が肝炎に関する正しい知識を身に着け広めていくことが求められている。さらに情報社会におけるメディアの功罪をよく見極めるとともに、誰もが責任のある情報リテラシーを持つことが必要である。

付記：本研究は、厚生労働省科学研究費（課題番号：H25－新興－指定－011）による研究成果の一部である。本研究にご協力いただいた方々に深く御礼申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 奥泉尚洋, 安井重裕「北海道B型肝炎訴訟の報告」日本の科学者39(6), 322-327, 2004年
- 2) 奥泉尚洋, 完全救済に向けてB型肝炎訴訟…最二小判2006. 6. 16(特集 最高裁判決2006…弁護士が語る)法学セミナー52(2), 26-29, 2006年
- 3) 厚生労働省科学研究(肝炎関係研究分野)難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業, 研究代表者龍岡資晃, 肝炎ウイルス感染者に対する偏見や差別の実態を把握しその被害の防止のためのガイドラインを作成するための研究 報告書, 2014年
- 4) 厚生労働省科学研究 集団予防接種によるB型肝炎拡大の検証及び再発防止に関する研究 報告書, 2013年
- 5) 龍岡資晃, 「論説ウイルス性肝炎患者に対する偏見や差別に関する研究について」学習院法務研究第9号, 2015年
- 6) 岡多枝子 三並めぐる「B型肝炎患者のエンパワメント」日本福祉大学教職課程研究論集, 第11号, 11-18, 2012年
- 7) 岡多枝子 三並めぐる「集団予防接種によるB型肝炎感染被害者遺族の悲嘆」現代と文化 第128号, 111-120, 2013年
- 8) 川喜田二郎, 「発想法—創造性開発のために」中公新書, 1967
- 9) 川喜田二郎, 「続・発想法—KJ法の展開と応用」中公新書, 1970年
- 10) 「霧芯館—KJ法教育・研修—」主宰, 川喜田晶子氏によるスーパービジョンを複数回にわたって受けた。
- 11) KJ法の手順は、①収集したデータを吟味し、主題にとって関係がありそうな内容をラベル化する。②何段階かに渡ってピックアップを繰り返し、ラベルを精選して(「多段ピックアップ」)「狭義のKJ法」のための元ラベルを決定する。以下、「狭義のKJ法」の手順となる。③ラベル群の「グループ編成」を行う。(「グループ編成」は、「ラベル拡張」「ラベル集め」「表札作り」で成り立ち、ラベルの質の近さが吟味されてグループが形成され、「表札」と呼ばれる統合概念が与えられてゆく)④このグループ編成を複数回繰り返し、ラベル群の統合化を図って行く。最終的に10束以内になるまで統合を繰り返す。⑤統合結果を図解化する(グループになったラベル群は「島」と呼ばれ、最終統合の各「島」にはその島をシンボリックに言い表す「シンボルマーク」が付与される。「島」同士の関係を「関係線」で示して構造化する)。
- 12) 前掲書4, 歯科医院では患者の43.7%が経験し、病院でのそれは29.6%であった
- 13) 前掲書5